

をうけたものであること。

- (2) O・Bの参加資格は部活動の協力者の程度とする。

12 禁止すること

- (1) 単独山行は厳禁する。
(2) 部員であると否とにかかわらず、上記指導者の引率しない山行は厳禁する。

以上が全文であるが、その他参考資料として、春山登山地選定の参考例、指導員の依頼先、装備例、遭難に要する経費等があげられている。

1. 登山地としては

- (1) 北アルプス方面 乗鞍岳(冷泉小屋～頂上往復) 八方尾根(黒妻小屋～八方池往復) 遠見尾根(雪上基礎訓練程度)
(2) 南アルプス方面 仙丈岳(北沢峠～頂上往復)
(3) ハツ岳方面赤岳(行者小屋～頂上往復) 硫黄岳(夏沢峠～硫黄岳往復) 天狗岳(夏沢峠～頂上往復またはクロユキ平～頂上往復)
(4) 奥秩父方面 金峰山(金山～頂上往復) 雲取山(氷川側～頂上往復)
(5) 登頂を目的とした富士山、谷山岳の山行はさけること。

2. 遭難に要する経費については、積雪期は捜索救援の作業が困難なため、莫大な費用を要し、簡単なもので5万円程度、面倒なものは数100万円かかる。しかもその負担は遭難者またはその家族の責任である。救援・捜索作業は多くの人々が仕事をはなれて動員されるので社会的にも責任が重い。

昭和40年3月から5月までの春山遭難の調査(全国高体連石川茂治氏調)によると53件中救出されたもの僅かに2件、重傷9件、他は全部転落死、疲労凍死、ナダレによる死亡事故である。また、この中で天候が雨雪、吹雪という条件が35件を占め、単独山行3件、高校生の遭難2件(死亡

3人、重傷2人)が含まれていることに注目しなければならない。

遭難者と登山経験者を調べると遭難は3年程度の経験者と経験者の僅少な者に多く、年令は20才～24才までが圧倒的に多く、次は20才未満のものである。

なお、長谷川芳郎氏の昭和25年から32年までの遭難事故調査によると、春山遭難は夏山の44.3%につき21.4%を占め、第2位である。遭難発生地は北アルプスが全部の27.0%、次は谷川岳の22.3%である。月別遭難件数をみると7月が最も多く、次は5月、8月、11月の順を示している。

3月23日連休明けの新聞をみると富士山では突風のため滑落遭難事故が相つぎ、2人が死亡、1人が重傷、また、吾妻山では猛吹雪のため道に迷って2人凍死、1人重傷、4人が軽い凍傷、上信国境ではスキーツアーの3人が絶望ということを知っている。

連休と春山の悲報は本年に限ったことではない。前に示した遭難統計がこのことをよく物語っている。

最近の登山者には、春山の天候の変わりやすいことや寒暖の差がはげしいこと、そして気温が上昇すればナダレ、降下すれば風雪の危険があるという、登山の基本的な知識や常識を欠如している者が多いことである。春山の気象や現地の調査もしないで、軽い装備で、ただ夏山のような気持ちででかける。その上体力も弱く、経験も乏しい。指導者もなくでかけたのではこの悲報をくり返すのも当然であろう。

登山者はもっと山のきびしさをよく知り、慎重な計画と安全な実施をはかり、他人に迷惑のかけない心構えを養ってほしい。特に高校の登山部(山岳部)で活動しているものは安全登山、正しい登山活動を行なって、山の味を十分に満喫してほしい。

スポーツ少年団と学校体育



常任理事 鈴木卯之吉

昨年の7月下旬本栖湖スポーツ少年団センターで、全国のスポーツ少年団の代表1,000名の健児が、正々堂々と規律ある分団活動するのを視察した。河口湖駅から本栖湖センターまでの輸送も1名の添乗員を付けて運行した。車内では東京と熊本が同乗し早くもリーダーの巧みな司会で歌合戦で人間関係を深める。

開会式は26日16時30分、国旗と日本スポーツ少年団旗の入場で開始された。つづいて参加各都道府県スポーツ少年団旗が、参加カウンセラーたちの手によって入場した。全員はトラックを4分の3周してフィールドの停止線に一旦停止、ついで全員一斉に前進に移った。前進する参加者は、まことに豪華なパレードを展げた。参加者の整列が終ると、開会が宣言され、陸上自衛隊第一師団富士学校音楽隊の演奏する君が代とともに、本栖湖センター宿舍バルコニーの掲揚柱に国旗を掲揚、スポーツの歌「若い力」演奏のうちに日本スポーツ少年団旗が掲揚された。このあと主催者のあいさつ、文部大臣の祝辞がよせられた。ここで常陸宮殿下からおことばを賜わり、参加者を代表して大分県の団員が宣誓文をよみあげ式典は最高潮に達した。スポーツ少年団の歌「みどりの朝風」が合唱され式を閉じた。

それから分団活動になり、夕食や入浴も規律的に、歌唱指導のあと、班長、分団長との懇談会が

あった。

第2日は、起床、洗面、環境整備、朝のつどい、朝食、講演、スポーツ少年団活動状況発表などをきき、自衛隊のジープで河口湖駅まで送られ帰京した。

スポーツ少年団は創設されてから満3年で団員は20万人を突破した。

人間は一年を通して青少年時代が最も大切である。それは人間一生の基礎となる心と身体の健康を決定する時だからであり、張りきれそうな強健なからだ、何ごとにも屈しない根強い精神力は青少年時代に作りあげなければならない。しかも日本の将来を双肩に担い、力強く伸びてゆこうとする青少年は、日々の学業に励むかわら、スポーツによって公正な精神と美しい友情をつちかい、世界の人々と手をたずさえることのできる立派な日本人となってもらいたいとのぞんでいる。

もはや青少年を立派に育成する温床はできたのだ。組織は確立されたのだ。

学校体育に関係ある指導者はこの現実を素直に認識すべきだ。現場の先生方が校外指導でなやみ、クラブ活動の実績が低調な原因を反省すべきである。そして超過勤務の手当とか自己本位の考えから脱却して、日本の将来を憂え、奉仕的な精神と体育に対する熱情をもう一度燃やしたいものだと考える。